

大学初年次における90分の学びの方法についての1考察

皆川 雅章¹

要 旨

初年次学生が高校段階までに経験してきた「50分の授業時間」,「ノートを取る」という学習スタイルを大学での学びに結び付ける試みを行った。ここでは90分の講義を大きく3つに分け,最初と最後の20分をそれぞれ小テストと演習,その講義の中心となる50分は,講義の説明をノートに取らせることを行っている。実施結果から,小テストの実施が履修者の学習にとって有用であることが確認できた。

キーワード: 初年次教育, 学習ノート作成, 板書, 小テスト

1. はじめに

初年次学生が高校段階までに経験してきた「50分の授業時間」,「ノートを取る」という学習スタイルを大学での学びに結び付ける試みを行った。ここでは90分の講義を大きく3つに分け,最初と最後の20分をそれぞれ小テストと演習,その講義の中心となる50分は,講義の説明をノートに取らせることを行っている。本報告におけるアプローチは2つの観点から行われている。第一に,高校で50分授業のリズムに慣れた新生入生にとって,入学時から90分間を同じペースで講義を受け続けることは,集中力の持続が困難であり,前後に演習をはさみ,説明を50分にすることには意味があると考えた。第二には,「配布資料をただ眺めているだけ.」,「伝える側は重要なことを話しているつもりだが,メモとらずにただ聞いている。『自分の問題』,『あとで困る』という危機感が感じられない.」,「整理された情報を提供されることに慣れてしまっていて話題のポイントを自分でつかめない。」といった学生達であつても高校段階までに行っていた「ノートを取る」という行為には抵抗がないと考えた。講義中の説明や教材提示は,板書やプリント配布以外に,内容に応じてタブレット型端末を活用して行い,その内容をノートに取らせている。以下では,札幌学院大学社会情報

学部 の概論科目と専門基礎科目における実施結果を報告する。概論科目(必修)は「コンピュータに関する知識からメディアに関する知識まで,幅広い用語の引き出しを作り,2年次以降に本格的に学ぶ専門科目への橋渡しを行う」ことをねらいとしている。1年次の必修科目でもあり,大学初年次において,①基本的な学習姿勢を身につける,②大学での学びの方法を身につける,③学ぶ楽しさ(達成感)を感じさせることによって,修学面での大学生活への適応を図る,ことも想定している。

2. 講義方法

2.1 時間の配分(20+50+20方式)

講義実施方法上,概論科目と専門基礎科目との違いは,前者はテキストを使った説明を行うことと,説明にタブレット型端末を使うこと,後者は計算中心で従来の板書を行うという点である。時間配分の形式は共通であり講義開始後20分,講義内容説明50分,講義終了前20分の3つに分けている。ここでは「20+50+20方式」と呼ぶことにする。以下では,配分したそれぞれの時間で実施している内容を説明する。

2.2 講義開始後20分

前回の講義内容の復習を主たる目的として,小テストを実施している。教科書とノートを自由に参照して問題を解くことを許している。解答に関して,履修者

¹ 札幌学院大学社会情報学部; minagawa@sgu.ac.jp.

表1 講義の出欠状況

	概論科目 (履修者39名)	専門基礎科目 (履修者36名)
定時出席率	93.2%	85.5%
出席率	93.7%	88.2%
合格率	87.1%	80.5%

どうしの相談を制限していないが、履修者の解答時間に合わせて問題数を調整しているので、時間に余裕はなく、まずは自力で解く必要がある。講義開始時刻後5分を超えた遅刻者には小テストは渡さず、引き続き講義に出席するには小テストが終わるまで待たなくてはならない。

上記2つの科目の定時出席率、出席率、科目合格率の平均値は表1の通りである。ここで定時出席率は講義開始時刻後5分前に着席し、小テストを受けた学生数の割合である。定時出席率よりも出席率の値が大きくなっているのは、講義開始5分後に教室に入り、受講した学生がいたことを表している。

問題に対する記憶が鮮明なうちに確認させるため、小テスト回収の直後に解答を配布している。解答を配るときには、座席ごとに学生の様子を見ながら渡すことにした。学生が自分の成績を毎週意識するようにするために、小テストは数日中に採点して返却する。

2.3 講義内容説明 50分

講義の中心部分の50分はタブレット型端末の画面をスクリーンに表示しながら(概論科目)、あるいは板書をしながら(専門基礎科目)行っている。

概論科目の場合には、まず、指定教科書を使って説明を行う。教科書全体を読む事はせずに、説明図や文章のポイントとなる個所にマークを付けながら説明を行い、その部分を中心に小テストの問題を作成することを履修者に予告しておく。基本的には、穴埋めの問題で、教科書を参照しながら答えられるようにしているので、学生にはその個所がすぐにわかるように、教科書にアンダーラインを引く、ノートにメモするなどの工夫するように伝えている。

ノートは、綴じられた従来型のノートを使用することとし、ルーズリーフは認めていない。講義終了後にノートを提出させ、ノートの提出によって出席としている。これによって、学生は毎回ノートを持ってくる必要がある。ノートを忘れた場合、ルーズリー



図1 講義用ノート



図2 講義用ノート添削例

フ用紙での提出は認めていない。その理由は、ルーズリーフ用紙の場合には他の配布資料などと混在したり、散逸したりする可能性があること、忘れ物が自分の責任であることを認識させること、である。学習上の習慣の一つとして、ノートには必ず日付を記入させている。ノートに日付を入れることによって、半年間の講義内容を記録として残させる。提出したノートは週末までに添削して返却している。図1に講義用ノートを示す。ノートはB5版を指定している。氏名シールを作成・配布し、ノートの所定の位置に貼らせることによって、ノートの管理をしやすくしている。図2は講義用ノートの添削例である。手書きのコメントとスタンプを併用している。スタンプの例を挙げると、演習課題がすべて出来ている場合には「Good」スタンプ、ノートの取り方が工夫されている場合には「Good Job」スタンプを使用している。

計算問題の説明は、従来は板書で行っていたものを、タブレット型端末の手書きソフトで行っている。この講義は中教室で行っており、教員が教壇から説明する

方式では、教員と履修者の間に、心理的にも距離感が出やすい。また、後方に着席し、授業参加に消極的な態度を示す履修者が出やすい状況を作ってしまうことが多い。今回は、そのような距離感を縮めることを意図したアプローチを採用した。タブレット型端末は無線でプロジェクタに接続されており、教室を移動しながら説明を行っている。移動しながら説明を行うことにより、この距離感を解消するとともに、履修者の反応を確かめながら講義が出来ると考えている。

専門基礎科目は、小教室で板書によって説明を行うという方式を採用しており、履修者にとって慣れた授業方式である。板書は「見方・考え方」が伝わるように意識して行っている。進度を重視するあまり、理解が伴わないまま授業が進行してしまうことは避けており、繰り返しによる知識・計算スキルの定着を優先している。小テストの問題の解き方は、前回の講義時のノートに書かれているので、学生はそれを参照しながら問題を解くことができる。前回欠席した学生、あるいは出席していても講義中にノートを取っていない学生は答えることができないことになる。この科目は基本情報技術者試験レベルの計算問題に習熟させることが1つの目標であるが、基礎学力に差があるために、レベルを上げすぎても、逆に下げすぎても講義が成り立たない。

2.4 講義終了前20分

最後の20分で、その日の講義の復習をノートに書かせている。両科目ともに、講義中に使用した計算問題の例題に基づいた演習問題を解かせ、「わかったつもり」で終わらせないようにするとともに、次回の小テストの予告（準備）編として考えている。毎回、講義終了時にノートを提出させており、ノートの記述内容と課題の出来をチェックする。そのときに、課題の解答が誤っていれば正解と説明を記しておき、学生が復習できるようにしている。この演習問題は、時間内に終わった学生に対してはノートを提出して教室から退出することを許可し、終わらなかった学生は、当日のうちに提出すれば良いことにしており、それによって理解度の差を補っている。

2.5 定期テスト

小テスト以外に15回の授業の中間で行う「理解度確認テスト」、終了後に行う「定期テスト」は一切の披見

を許さず、自力で解くことを要求している。いわゆる「持ち込み可型」のテストは、小テストで実施しているので、ここでは「一発型」のテスト形式にも慣れさせることを意図している。テスト前には「講義内容のまとめ」をノートに書かせ、これも評価の対象としている。このことを通じて、毎回ノートを取ることの必要性、ノートの記録に基づく試験準備の有用性を認識させることを意図している。

3. 到達点と考察

毎回小テストを行うことの利点は、講義開始と同時に教室内が学ぶ雰囲気になっていることである。ノートと小テストは予め教務課の窓口で受け取っておくようにしてあるので、講義開始時に教室内で返却することによる「ざわつき」を解消することができる。

小テスト作成時の1つの課題点は、理解度の低い学生もある程度解答でき、理解の速い学生が退屈しないような問題作成である。これまでのところ、理解度の高い学生が15分程度で終了し、低い学生が解ききれない問題を少し残す程度になっている。

ノート提出・返却は教室内において学生との対話の材料になっていると考えている。課題がよく出来ている学生、ノートのまとめ方の上手な学生のノートには、「GOOD」、「GOOD JOB」といったスタンプを押して返却し、それを材料にした会話ができる。例えば教室内で授業開始前に学生達がノートを見ている場面で「全問正解だったね。次回も頑張ろう。」といった声かけが出来る。

講義終了前20分の課題では、互いに答を確かめあい、遅れている学生を助けるなどの行動が観察され出した。

学習のリズムを作り出すという意味では今回の方式は今のところ有効と見ている。以下にノートに書いて提出させたアンケートを示す。一定の記述量があり、具体的なものを原文のまま掲載している。ここでは、小テストの実施について、肯定的な意見が見られる。

アンケート結果

- 1) 授業の流れと用語の解説などはわかりやすく良かったとおもいます。また、小テストを授業の始めに行うことは授業に集中しやすくなるという意味でいいと思いました。他にも、テスト前に

ノートをもとめることで勉強したことに対して理解を深められるのでこれからも続けてほしいと思います。反対に、改善してほしい点は、授業のときに iPad を持って歩き回らないでほしいところです。これは授業全体では1度しかなかったと思うのですが、声が届きにくくなって、話している内容が聞き取りにくかったです。なるべく授業は定位置でやってほしいとおもいました。

- 2) 授業の最初に前の授業の範囲の小テストがあり、内容を思い出せて授業が理解しやすかった。スクリーンの大きさが小さく、見えづらかった。
- 3) 毎回小テストを行うことが良かった。毎時間前回の復習が小テストによってできるので、効率よく覚えることができた。先生の次に進むスピードが少し早い気がしました。習ってるところを完璧に覚えれず次に進むことが結構あったので、次に進むスピードをもう少し遅くしていただけるとありがたいです。
- 4) 授業の始めに小テストで毎回の授業の内容を振り返ることができるのは良い点だと思います。改善すべき点は、授業中スライドを動かすのが早いと感じることが多かったので、その点の調整があると良いと思いました。
- 5) 講義の初めと終わりにある小テストと課題があるおかげで適度な緊張感があって良いと思います。(講義の悪い点) 特に見当たりません。
- 6) まず、良かった点は、毎回小テストがあるので前の週でやったことが思い出され、その日の授業にのぞみやすかったところです。改善すべき点は、参考書の進み(ページ)がバラバラなので、何についてやっているのか、整理しにくかったので、参考書の最初のほうのページから進めばいいと思いました。
- 7) この講義は毎回小テストという形で前回の復習をしたので忘れず次の講義に集中できた。良かった。

4. おわりに

学習のリズムを作り出すという意味では、今回の『20+50+20』方式は機能していると考えている。アンケート結果から、小テスト、確認テストの実施に関しては学生から肯定的な意見が出されたことは1つの収穫であった。『ノートを自らまとめる』、『自ら予習・復習する』力をつけることについては今後の課題である。

参考文献

- 皆川(2012), 1年次学生にメモやノートを取らせる習慣を身につけさせる試み, 初年次教育学会第5回大会発表要旨集, 108-109.
- 皆川(2013), 高校での学習スタイルを大学での学びに結び付ける試み——ノートを中心とした講義展開——, 初年次教育学会第6回大会発表要旨収録, 111-112.

How to Use Ninety Minutes for University First Year Classes

Masaaki MINAGAWA¹

Abstract

This paper describes some empirical results of using ninety minutes for university first year classes. In this approach, one class is divided into three parts; twenty minutes of review test, fifty minutes of lecture, and twenty minutes of exercise. The results show that the review test is useful for students.

Keywords: First Year Experience, Note Taking , Writing on Blackboard, Review Test.

¹Fuculty of Social Information, Sapporo Gakuin University; minagawa@sgu.ac.jp.